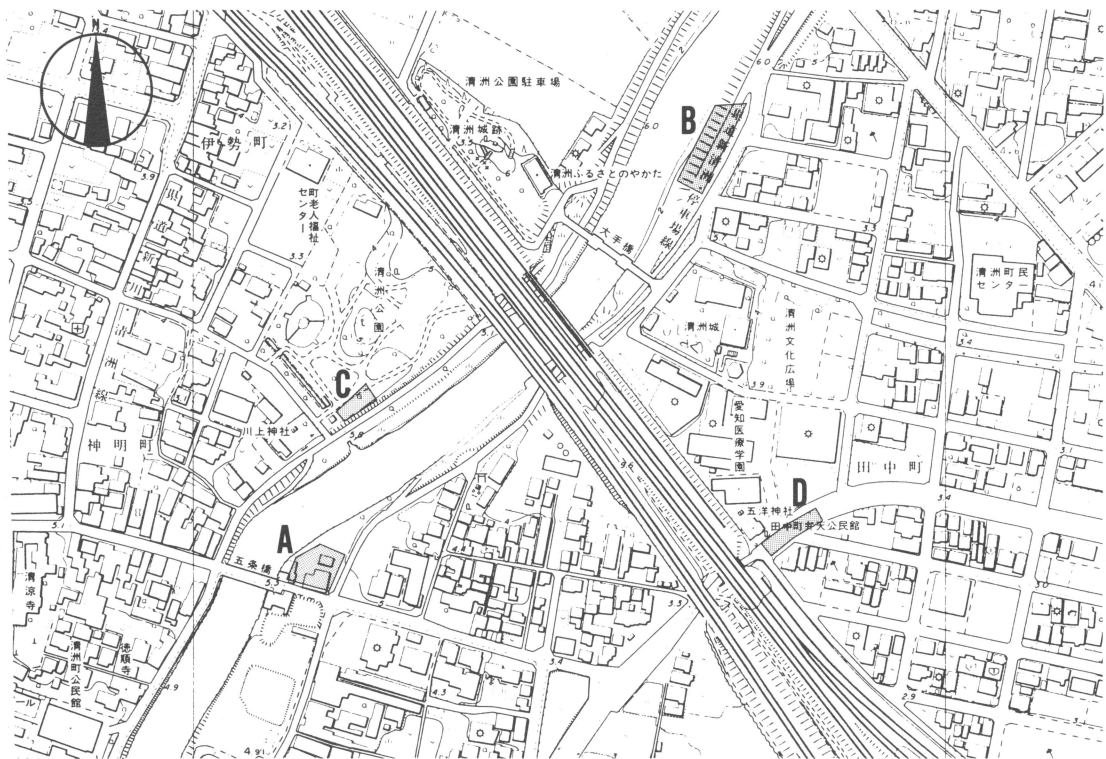


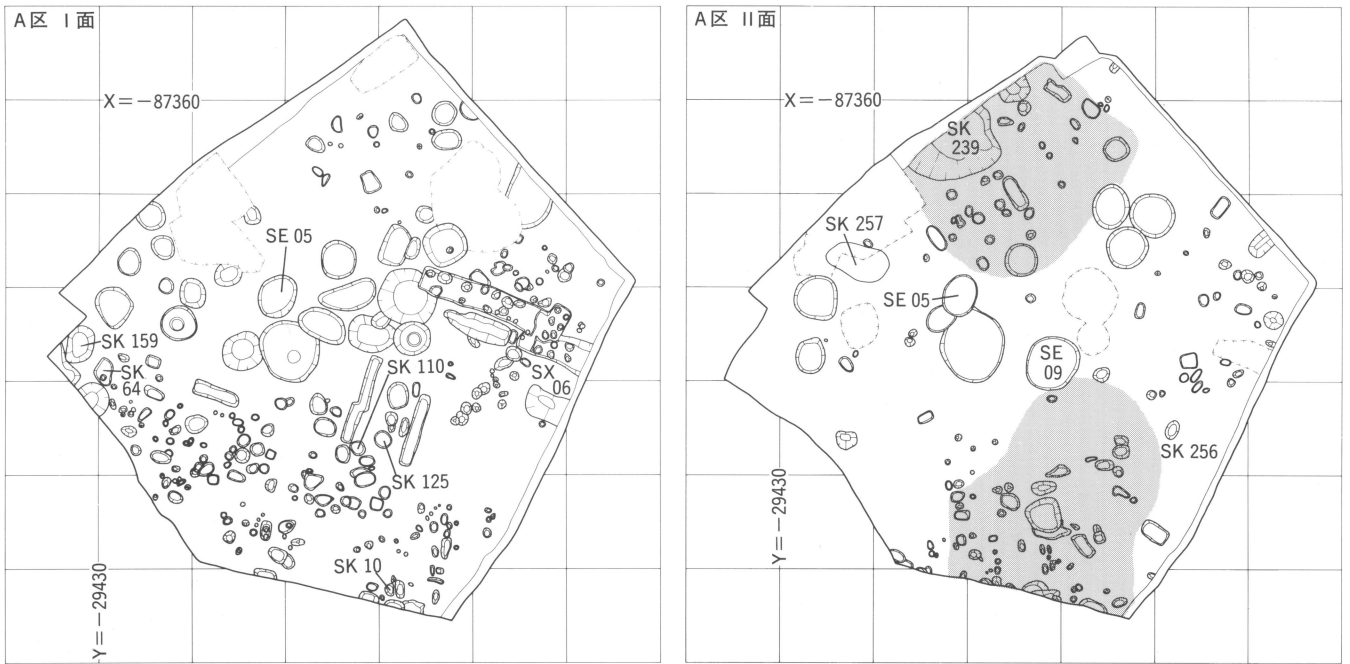
清洲城下町遺跡

調査の経過 清洲城下町遺跡は、五条川流域に形成された自然堤防とその後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡であり、行政的には西春日井郡清洲町に所在する。発掘調査は昭和59年から継続されており、今年度は五条川改修に伴う調査1520㎡（A・B・C区）と県道清洲新川線J R古川架道橋建設に伴う調査500㎡（D区）を実施した。

調査の概要 A区は自然堤防の西端に位置し、中世、城下町期、宿場町期の多数の土坑、ピット、井戸を検出した。中でも、百代寺窯式期の一括遺物が出土した土坑（S K 256）、大窯 I 期の一括遺物が出土した土坑（S K 239）、半胴甕が合わせ口になって出土した宿場町期（18世紀後半）の一括遺物を含む土坑（S K 159）は注目すべき遺構である。また井戸（S E 05）の底から城下町後期の金製のキセル、金メッキを施した飾り金具が出土した。B区では宿場町期の溝、土坑を検出したが、五条川の旧堤防は確認されなかった。D区は自然堤防の縁にあたり、中世から城下町前期の溝、土坑、井戸を検出した。特に、大窯 I 期の遺物が一括出土した溝（S D 01）は、過去の調査から想定されている方形居館群の一部であろう。C区は清須城本丸とも想定される地内にあり、明治初期の溝と城下町後期の集石を確認した。集石の共伴遺物に金箔瓦、花押を墨書した瓦があり、当時の清須城を解明する貴重な資料となるであろう。（大竹正吾）



第1図 調査区位置図 (1/5,000)



第2図 A区遺構全体図 (1/400)

※アミは焼土部分



A区I面全景



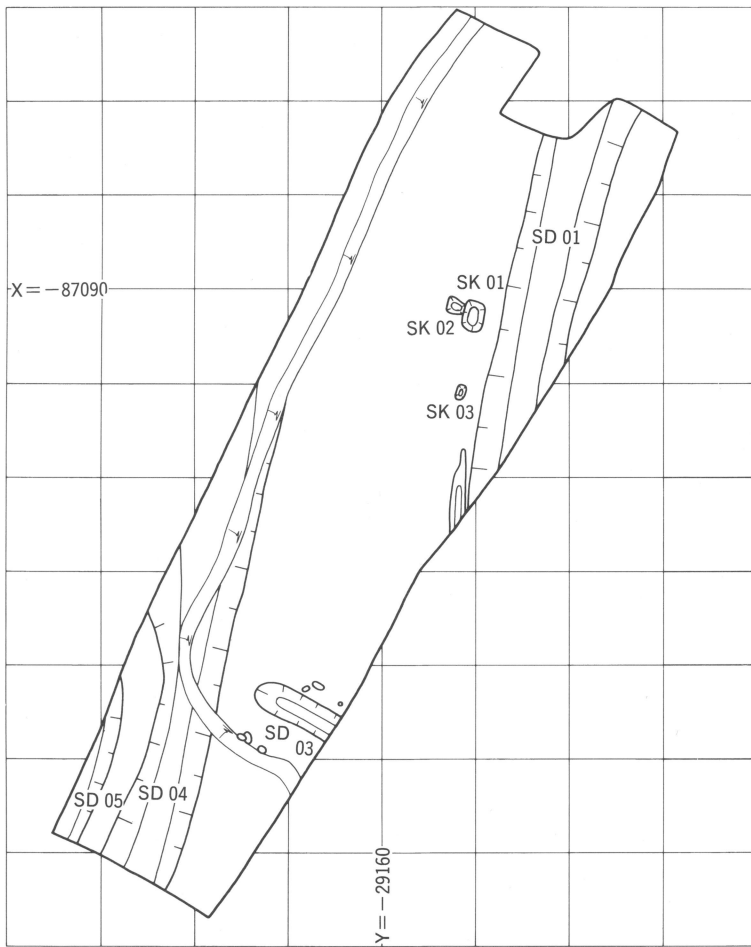
A区II面全景



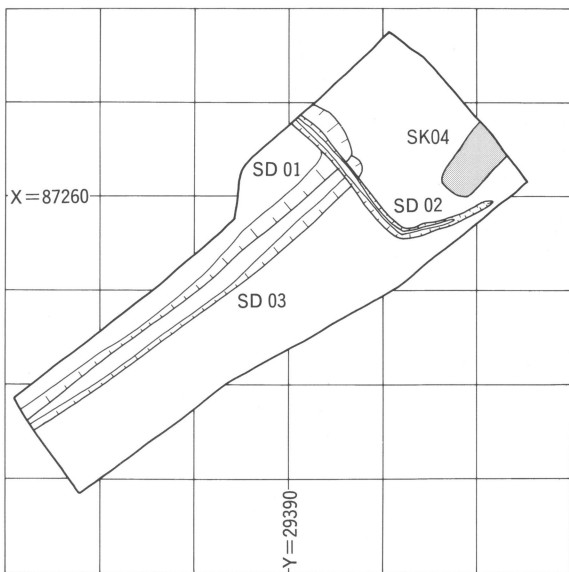
A区SK125遺物出土状況



A区焼土面検出状況



第3図 B区遺構全体図 (1:400)



第4図 C区遺構全体図 (1:400)



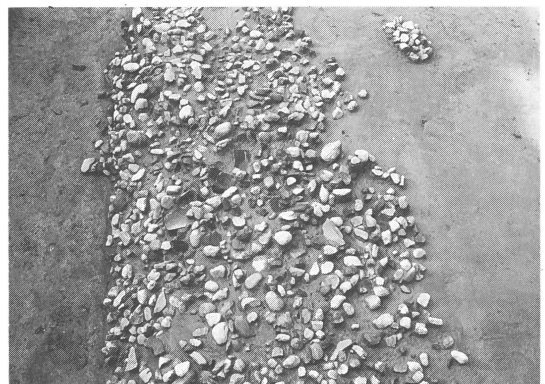
B区全景 南より



B区全景 西より



C区S X04全景 東より

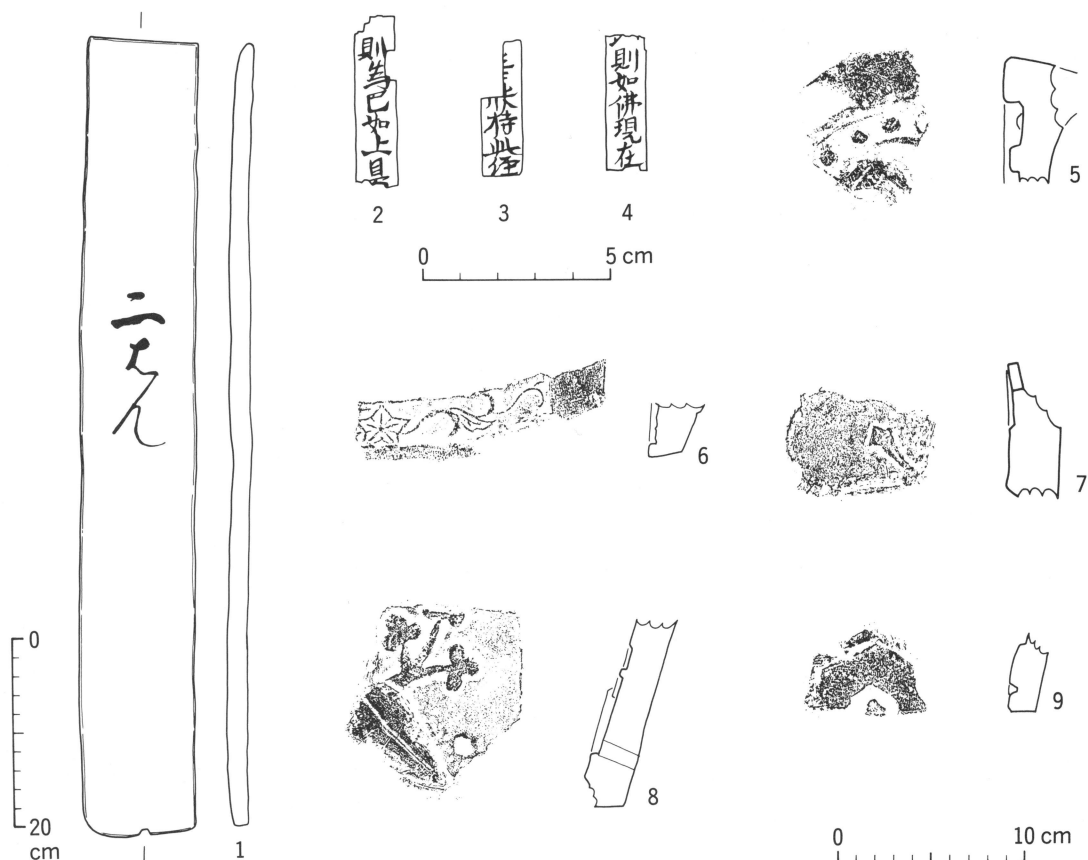


C区S X04 北より

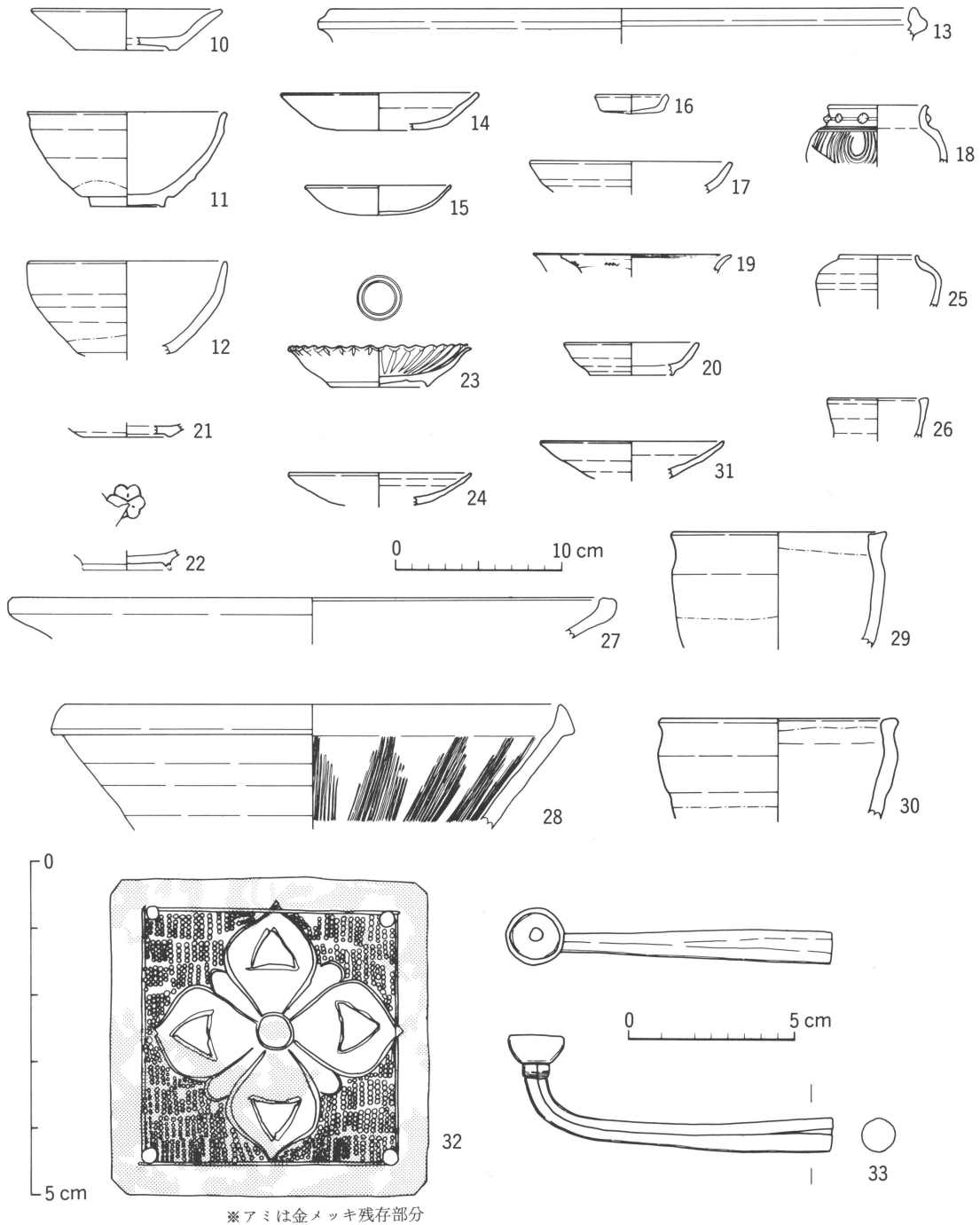
五条川改修
関連 (A・
B・C区)

A区 五条川左岸、五条橋の北東に位置し調査区の南側には美濃街道が東西に走る。検出した遺構は、土坑335 (15) 基、ピット385 (10) 基、井戸17 (6) 基、その他12 (2) 基で、溝は検出されなかった。() 内の数字は宿場町の時期の内数である。主要な遺構として、昭和の防空壕 (S X 06) 宿場町期の土坑 (S K 125・159) 城下町期の土坑 (S K 239) 井戸 (S E 05)、中世の土坑 (S K 256・257) がある。なおA区及びS K 239・256等については平成6年3月刊行の報告書『清洲城下町遺跡Ⅳ』に掲載した。ここでは報告書に掲載できなかった城下町期のS K 10・64・110、S E 05・09とS K 257について述べる。

- S K 10 長径62cm×短径48cmを測る炭混じりの埋土で10の銅緑釉の稜皿が出土。
S K 64 長径152cm×短径100cmを測り少量の炭が混じった埋土で、11～15の遺物が出土。15は銅製の皿 (灯明皿)、他に天目茶碗片2点、甕片1点、土師質皿片16点。
S K 110 長径82cm×短径70cmを測り砂炭混じりの埋土で16～18の遺物が出土。18は播座の茶入れで播座部分には灰釉が施される。他に天聖元宝1点と平瓦1点。
S E 05 桶による二段組の井戸で径64cm、長さ97cmが上段桶で上部は一部腐っていた。5、20～33の遺物が出土。32は銅板に金メッキの飾り金具、33は金製のキセル。
S E 09 桶による二段組の井戸。径64cm、長さ84.5cmの上段桶の桶板には1の「二ばん」の墨書がある。下段の桶の長さ81.3cm。



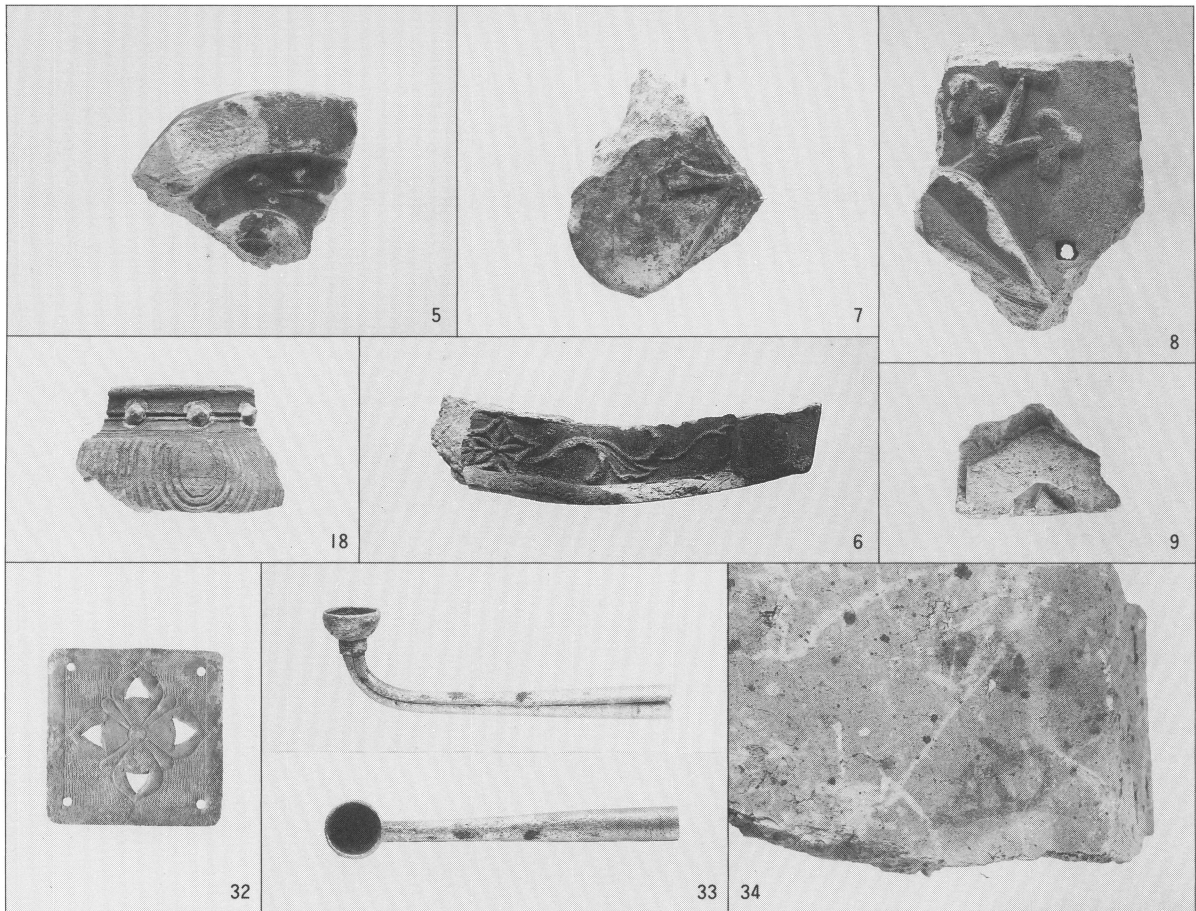
第5図 A・C区出土遺物実測図



※アミは金メッキ残存部分

番号	器種	遺構番号	口径(cm)	釉	その他	番号	器種	遺構番号	口径(cm)	釉	その他
10	稜皿	SK10	11.4	銅緑		21	皿	SE05		鉄	底径推5.0cm
11	天目茶碗	SK64	12.0	鉄	化粧掛け	22	皿	SE05		灰	底径推5.4cm
12	天目茶碗	SK64	11.7	鉄		23	襷皿	SE05	10.3	灰	
13	播鉢	SK64	35.0	鉄		24	重圈皿	SE05	11.0		
14	土師質皿	SK64	11.8			25	茶入	SE05	4.6	鉄	
15	灯明皿	SK64	8.8		銅製	26	香炉	SE05	6.0	灰	
16	土師質皿	SK110	4.3		手づくね	27	播鉢	SE05	36.0	鉄	
17	丸皿	SK110	12.1	灰		28	播鉢	SE05	28.8	鉄	
18	播座茶入	SK110	5.8	鉄		29	鉢	SE05	12.6	鉄	
19	青花皿	SE05	11.8			30	鉢	SE05	14.0	鉄	
20	小皿	SE05	8.0	灰		31	土師質皿	SE05	11.0		

第6図 A区出土遺物実測図



S K 257 最大幅180cm、長さ336cmを測る。円礫と12世紀～14世紀代の山茶碗の破片を敷き詰めた状態で出土。その下の標高1 m 40cm前後より2～4の柿経が出土。

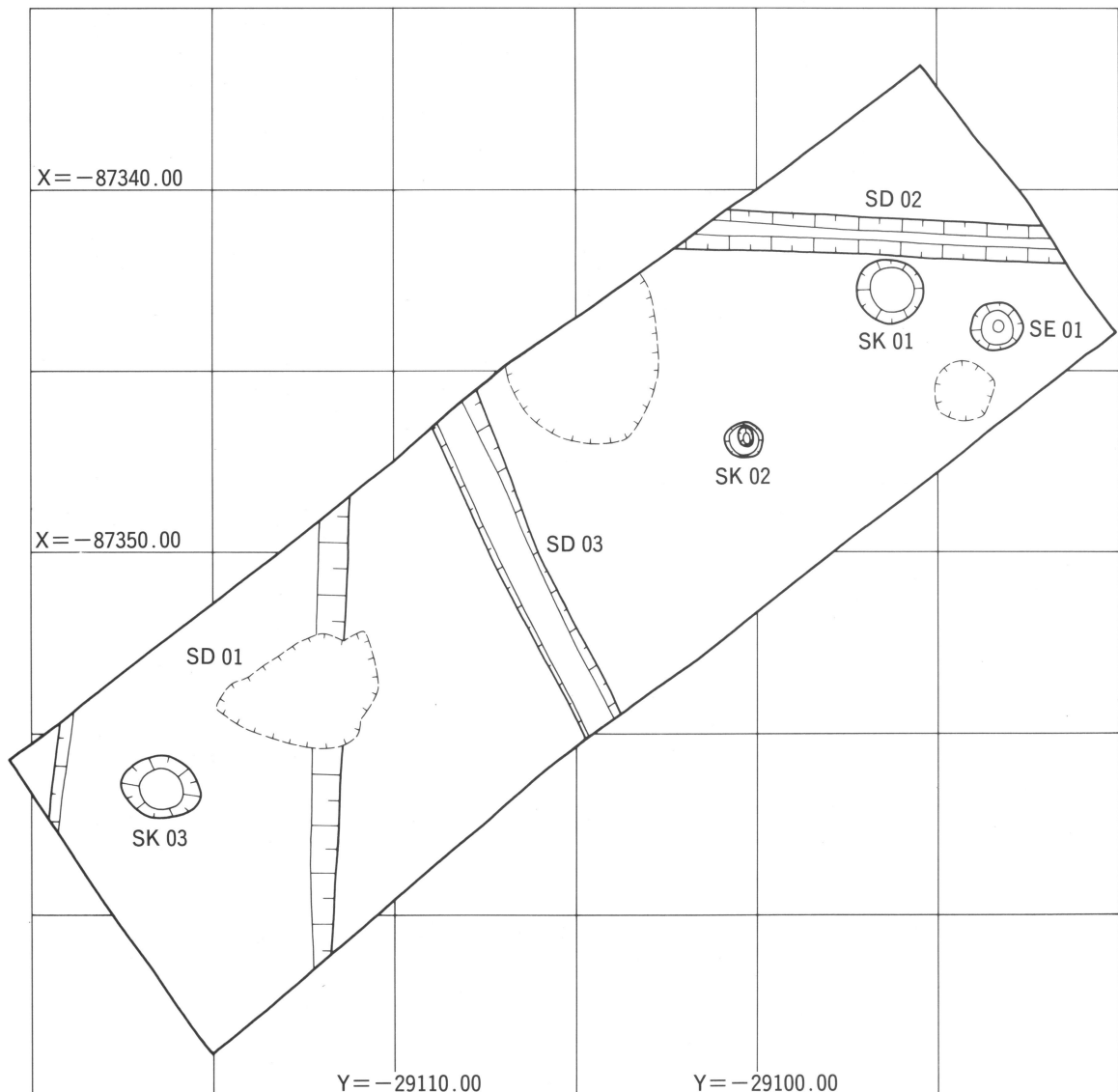
B区 五条川左岸、清洲橋とJ R東海道線の間位置する。検出された遺構は溝5条、土坑9基で、いずれの遺構も19世紀代の陶磁器が出土した。現況が堤防のり面であったので江戸時代の堤防が確認できるのではと期待したが、本調査区では確認できなかった。

C区 五条川右岸、清洲公園の南東隅に位置し、清須城本丸地域に当たる。検出した遺構は溝3条と石の集積3ヶ所で、溝からは幕末から明治初期にかけての陶磁器が出土。石の集積のなかで調査区の北東から検出した幅約2 m長約4 mのS X 04は、調査区の北側に続いていくものと思われる。10～15cmの円礫といぶし瓦の破片を用いて、自然堤防を形成している砂層の崩落を防ぐために築かれているようである。出土遺物として須恵器、山茶碗、播鉢等の破片があるが宿場町期のものは全く出土していない。多量の平瓦片に混じって6～9の軒平瓦や飾り瓦、他に軒丸瓦が出土しており、7は金箔瓦、34は花押のある熨斗瓦で幅13.5cm、厚さ2.5cmを測る。花押は瓦の上面右下隅に書かれ、縁は斜めに切られているが反対側の縁はほぼ垂直に切られている。胎土は白色で1～3 mmの小石を含んでいる。

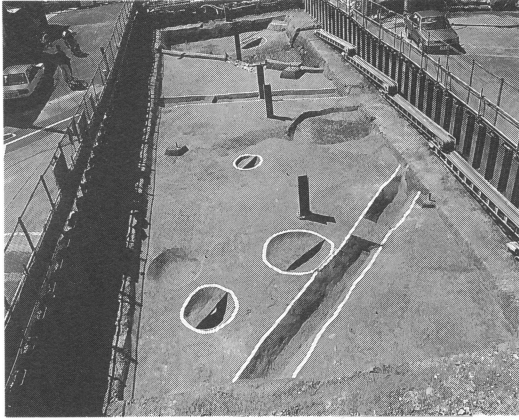
花押から人物の特定は非常に難しいが、江戸時代のようなパターン化した花押ではなく個性のある花押である。戦国から安土・桃山頃に比定され、松平忠吉の家臣で「清須三奉行」の一人である寺西藤左衛門のものに似てはいるが確定できない。名古屋市博物館の下村信博氏による御教示で、記して謝意を表するものである。 (小澤一弘)

清洲新川線
関連
D区

D区は五条川左岸の自然堤防の縁に位置する。調査前の状況は道路だが、明治17年の地籍図では畑地として記録されている。検出された遺構は溝3条、土坑2基、井戸2基であった。このうち南北の溝（SD01）は上層の削平にもかかわらず、幅7.86m、深さ1.2mを測る。遺物は埋土下層に集積し、土師器皿、陶磁器を中心に膨大な量の出土をみた。さらに木製品（漆椀、箸、柄杓、卒塔婆、鞘など）や骨（ヒト、イヌ、ウマ、シカ、ウシ、カメ、スッポン、キジなど）の残存状況も良好であった。遺物の所属時期は、陶磁器類から城下町前期（大窯I期）が考えられ、直交する東西の溝（SD02）の検出状況、周辺地域の過年度調査成果などから方形居館の区画溝が想定される。詳しくは遺物の整理を待ちたいが、土師器皿、木製品に墨書が多くみられ興味深い。（蟹江吉弘）



第7図 D区遺構実測図（1：200）



D区全景（北東から）



D区 S D 01遺物出土状況（北東から）

まとめ 今回の調査を過年度の成果とあわせてまとめると次の様になる。

- ① A区の宿場町期の主な遺構として、合わせ口になった半胴甕が出土した土坑(S K 159)があり、時期は18世紀後半である。また、五条川の旧堤防の裏ごめを確認した。
- ② 昨年度と今年度の調査から、五条橋の東、美濃街道沿い周辺では、大窯前半期に何回も遺構が掘り込まれたり整地されたりしており、標高4 m 50cmから2 m 60cmの間の遺構は大窯前期に属することが確認された。
- ③ A区下面の広い範囲で焼土面が確認され、焼土を含む面の下から大窯I期の遺物が多く出土し、同期の良好な一括資料を出土した土坑(S K 239)等が検出された。井戸の在り方と地籍図の区画割がほぼ一致しており、街道沿いの屋敷のあり方を知る上で興味深い資料となった。
- ④ A区において、従来の調査では後背湿地上か自然堤防の変換点に見られた中世の遺構(S K 256)(百代寺窯式期)が自然堤防上で検出された。また、旧五条川の河道の縁から中世の土器や石を引き詰めた遺構(S K 257)が確認されたが、性格ははっきりしていない。これらから中世には自然堤防が形成されており、この上に城下町期に堆積したと考えられる五条川の旧河道堆積物と増水による厚い堆積物が載っているのが確認できた。
- ⑤ B区では、いずれも19世紀頃の遺構を確認したが、五条川の旧堤防は確認できず、現在の堤防下に存在する可能性がある。
- ⑥ C区の自然堤防の縁にある集石は、性格は不明であるが共伴遺物に城下町期後期の金箔瓦、花押のある墨書瓦があり、清須城の本丸に係わり合いがある構造物の可能性はある。
- ⑦ D区の溝(S D 01)からは城下町前期(大窯I期)の陶磁器、土師器皿を中心とした大量の遺物が出土し、ヒトの頭蓋骨をはじめ多種類の獣骨、木製品も含んでいる。この溝は地籍図、過年度の調査結果から方形居館の区画溝と想定される。

(大竹正吾、蟹江吉弘、小澤一弘)